

## シンポジウム「持続可能な動物飼育と動物介在教育の在り方」

並木 美砂子

### はじめに

動物がいるだけで教育になるということはありません。動物介在教育の目的は ①相手（動物）の立場に立てる（言語表現ができない「動物」の行動から内的状態を根拠をもって想像できる人材の必要性）②動物福祉を学ぶ場所として（\*動物福祉とは、動物の要求や状態を察知できること）などがあげられるでしょう。

そして、学校で動物を飼育することの意義については、本研究会の数多くの報告にも明らかのように、子どもたちの希望に沿って、可能なできる限りの条件をそろえ、教師や家庭の協力を得ながら実践を進めてきたことに意義があります。ここでは、動物の側に立つ意義を認めながら、学校という場で可能なとりくみについて、および、配慮すべきことについてとくにカイウサギとモルモットに関してご紹介してみたいと思います。

### 1 両種とも被捕食動物である

カイウサギはアナウサギという野生種が中世ヨーロッパの修道院で家畜化され、地中に巣をつくるため、追い出してつかまえるフェレットの馴化とともに食料や皮革目的で飼育されてきました。アナウサギ自体がもともとキツネやオオカミなど肉食動物やワシやタカなどの猛禽類に狙われる存在ですから、音に敏感で、危険を感じるとぺたりと体を地面につけたり、巣穴に入り込んで身動きをしないなどの行動をとる動物です。穴を掘るための四肢の使い方は、土かきに適していますし、スタンピング（トントンと後ろ足で地面をたたく）は仲間に危険を知らせる合図でもあります。

モルモットは、今でもアンデス地方では市場で食料として売られており、暖をとるために人家のまわりに住み着いた祖先種が、ときどき捕まえられて食料になったことが家畜化の始まりといわれています。Guinea Pig という英名の Pig は、現地では肉としての価値があったからとされています。本種は、やはり猛禽類に狙われることも多く、高いところ

を何かの影がサーッと動いたり、聞きなれない音がすると急いで隠れ場に逃げ込んだり、それができないときは、フリーズといって動きを止める習性があります。また、仲間に危険を知らせるため、飛び上がって向きをかえ、ピッと短い声をあげることもあります。南米にはおどろくほどたくさんの「草食げっ歯類」がいて、チンチラ、デグー、マウラなども親戚にあたりますが、その多くがやはり被捕食動物なので、モルモットとも共通した特性もっています。

ですから、隠れ場や穴に入って出てこないことは被捕食者であるウサギやモルモットの「本来のその動物らしさ」の表れです。むしろ、そういう場がないと非常にストレスを感じてしまうことになります。

### 2 多様な行動を知る事が大切

捕食される恐怖から逃れるための行動のほかにも、採食や飲水行動、体のメンテナンスにかかわる行動、他個体との関係を示すような行動など、さまざまな行動がみられます。とくに、複数頭飼育されている場合は、年齢や性別にも影響される順位の影響もあり、相手を威嚇したり攻撃的になったりすることもあります。とくにカイウサギの場合は人間のように「みんなで仲良くいっしょに」が通用しないことが多いのですが、それは、それぞれが「自分のテリトリー（なわばり）をもつ」からでもあります。

毛づくろいにも、どういう順番で行うかの決まりがあり、カイウサギは自分の前足をなめてその水分を利用して顔まわりをきれいにしたり、後ろ足で耳後ろから背中をかいたりしますし、穴にこもる動物なのでメンテナンスには時間をかけます。ただ、毛づくろいをしているのは安心していているときの表れでもありますから、見守ることが大切です。モルモットはかなり頻繁に行い、歯もよく使います（次頁図参照）。



このように、行動に着目すると、次にどのような行動がみられそうか、少しずつ予想も可能となり、見るのが楽しくなるでしょう。行動目録(分類され名付けされた行動)はエングラムとも言いますが、大きく、採食行動や飲水、睡眠、毛づくろいなどの個体維持にかかわること、隠れたり逃げ込んだり、危険察知のシグナルを発する危険回避にかかわること、他の個体とかかわる社会行動(繁殖行動も含まれます)などに大きく分かれますが、その内容は観察者の目的によって細かく分類されることもあります。

### 3 ハズバンダリートレーニング

動物が自主的に行動を選択できることを条件に、それが、人間との共同生活をうまくできるためにその自主性を利用することも可能です。たとえば、その動物を捕まえなくても(捕まるといのは、非捕食動物においては恐怖の感情を伴うのでよいことではない)、自らの意志である場所や囲い、クレートなどに入ることができるようになります。そのすすめかたは、一般的に次のような原則で行われます。

- ・スモールステップで少しずつ
- ・いやがることをしない
- ・ほめる(報酬としては大好きな餌を使用)
- ・同じタイミングでの報酬(だれが行ってもよいように)
- ・嫌悪刺激の排除(罰を与えることはしない)
- ・ことばによる介在を積極的にとり入れる
- ・同一者によるトレーニングをある程度進めてから、そのルールを逸脱しないようにトレーニングをすすめる(複数者でも可能になるように)

- ・目標とする行動の出現があった場合にその維持のためのトレーニングを継続する(下図参照)。



こう書くとたいへんなようですが、最初のステップをきちんとふめば、維持していくことに注力すればよいので、理屈をわかれば小学生でも可能です。ただ、いやがっているのを無理にとかしかりつけるなどはしないよう、注意が必要です。これらのトレーニングは、動物自身が自主的に判断してその行動をとろうとするのを、報酬を用いて援助するのが原則です。つまり、「待つ」ことが飼育する側に求められ、それは日常的な「飼育作業」とは異なるため、その必要性を認める人々が積極的に協力しておこなっていく必要があります。このトレーニングによって、呼び寄せたり、必要な場所にいらしてもらったりするなど、教育的な活動に参加してもらうことも十分可能となるでしょう。

また、人の手が触れることに馴れてもらうのはハンドリングとも呼ばれますが、個体によってはそれをすぐ受け入れる場合もあれば、なかなか許さないこともあり、そこには個体差がみられます。それを個性としてとらえて、各個体の特性をみることも教育的には重要だと言えます。

### 4 毎日の飼育経過の記録

このように、個体別の特性をみながら、行動をよく見て、ときにはトレーニングを続けるうえで、飼育日誌は重要になります。その項目としては、①毎日の給餌や残餌の把握②体重や体毛の状況③糞の状況や分泌物の有無など、それぞれの個体の「状態」を把握すること、および、④トレーニング(ハンドリング)状況の記録も必要でしょう。なかなか、学校現場でそれを逐一だれが記録するかと

いう話になると、とても応じられないと尻込みすることもあるかもしれません。

簡易的には、項目を入れておいてそれをチェックするような日誌もよいでしょう。日誌をつけることが重要なのではなくて、ひとつひとつの項目(排泄のようす、採食の質や量、利用場所の変化など)が動物にとってどのような意味をもつものなのか、常に動物側から把握できるようにするための訓練のような役割が日誌や記録にあります。1週間、1か月とたつなかで、動きや声などにちょっとした違いを見つけたりすることもあるでしょう。聴診器で心拍音を聞くなども、生きている、という実感を味わうという「人間側の教育」のためだけではなく、どういうときに早まるか、昨日と同じ時間に同じ人が聞いてどんな違いがあるのかなどを知ることで、健康状態を把握する助けになるような聴診器使用も時には必要かもしれません。

## 5 動物福祉の実践を学校飼育動物に

行動をよく見る、ちょっとしたしぐさの違いを見て取ることができるトレーニングを試みるなどは、「動物福祉」の実践とも言えます。日誌の丁寧な記載もその中の重要な部分です。

学校飼育活動全体ということになると話は大きくなってしまいますが、個々のウサギやモルモット、ニワトリなど、その個体別の状態に対して気を配るといった行為は、動物福祉の実践でもあり、学校飼育活動が教育的に

なるかどうかは、この観点を入れていくことにかかっているかもしれません。

子どもたちが世話に参加することで学習効果にどうつなげるのか?ということを考えますと、まず、世話を受ける動物の立場を理解しようとするのをベースにし、世話にあたる子どものサポートを大人が責任をもって行っていくことが重要に思います。とくに、飼育されている動物の状態理解を目標に、動物が自らの意志で子どもたちの側に近寄って積極的にかかわりを求める場面づくりが可能になれば、それはこれからの「ふれあい」の新しい場面となることでしょう。物理的な接触も、動物福祉の考え方を基盤にした「動物自身の意志」を尊重した飼育活動の一部として成立することが重要に思われます。

(帝京科学大学生命環境学部特任教授)

## 参考文献

Huitink, F. M. (2021). Habituation to human presence and transport box training-An explorative study on the possibilities of habituation and positive reinforcement training in Dunkin Hartley guinea pigs (Master's thesis)

<https://www.thepetsavvy.com/guinea-pig-behavior>